

コーパスを用いた日本人学習者の句動詞の使用に関する研究

飯 尾 豊

1. はじめに

英語におけるいわゆる句動詞表現に関して、Laufer & Eliasson (1993) や谷他 (2001) が指摘しているように、母語話者はかなり頻繁に使用しているが、非母語話者の英語学習者はそれほど多くは使用していないことが従来よく言われてきた。この指摘は実際に正しいのであろうか。またそうであるならば実際の使用状況はどのようなのであろうか。

そこで本論文では、英米の母語話者のコーパスである BNC (British National Corpus)、COCA (The Corpus of Contemporary American English)、及び LOCNESS (The Louvain Corpus of Native English Essays)、また非母語話者の学習者コーパスである G-ICLE (German Component of the International Corpus of Learner English)、I-ICLE (Italian Component of the International Corpus of Learner English)、JEFLL (Japanese EFL Learner) 及び PERC (Professional English Research Consortium)、NICE (Nagoya Interlanguage Corpus of English) の各コーパスを取り上げ、母語話者のコーパスにおける句動詞の使用状況と、非母語話者の中で主にドイツ人、イタリア人、日本人の各コーパスによるデータを比較し、その実態を客観的に提示して、この疑問に答えるとともに、日本人学習者の英語学習への示唆を考察したい。

本論文で取り上げた日本人学習者コーパスである JEFLL コーパスの研究には投野 (2007) があり、動詞や前置詞、不変化詞等の品詞については触れられているが、句動詞についての直接的な分析は行われていない。Uchida (2012) は日本人中学・高校生の句動詞の使用の発達の傾向について JEFLL コーパスを用いて一部触れているが、他には日本人学習者に関する限り使用頻度についての調査はほとんど行われていない。非母語話者についての調査は Waibel (2007) のドイツ人、イタリア人学習者を取り上げたものがあり、句動詞の使用頻度も詳しく扱われているので本論文では JEFLL コーパスとともに、その調査結果を活用して分析する。

具体的には本論文では句動詞に関する使用頻度を調査することにより、どのような句動詞がよく用いられているのか、母国語話者と非母国語話者の使用状況を比較する。その結果から、母語話者に好まれるが非母語話者には好まれないもの、逆に非母語話者に好まれ母語話者はあまり使用しないもの等を提示し、その要因を考察する。

論文の構成はまず母語話者及び非母語話者であるドイツ人、イタリア人学習者の句動詞の使用頻度に関するコーパスを用いた先行研究を概括し、次に日本人中高生を含めた日本人学習者による句動詞の使用に関する研究方法を提示する。その後それらの分析結果に考察を加え、最後にまとめを行う。

2. 先行研究

英語の句動詞についてのコーパスを用いた使用頻度に関する主な研究には Biber et al. (1999)、谷他 (2001)、Gardner and Davies (2007)、Waibel (2007)、Liu (2011) の5つが挙げられる。これらにはそれぞれ句動詞の使用に関する有益な情報があるとともに重要な問題点や課題も含まれている。以下の部分ではまず各研究の概略について説明する。

Biber et al. (1999) は31個の限られた句動詞を取扱いそれぞれの使用頻度をジャンル別に記述しているが、大まかな目安しか与えられていない。谷他 (2001) は映画字幕を利用してその中に出てくる91個の句動詞の頻度の分析を詳細に行っているが、10個の基本動詞 (put, get, come, take, run, go, turn, make, hold, cut) と16の不変化詞 (about, across, along, around, aside, away, back, by, down, forth, in, off, on, out, over, up) で構成される句動詞のみを調査対象としている。同様に Gardner and Davies (2007) はそれより多くの100個の高頻度の句動詞を調査し頻度も具体的に提示している。しかし、それらは20個の限られた動詞 (go, come, take, get, set, carry, turn, bring, look, put, pick, make, point, sit, find, give, work, break, hold, move) と16の不変化詞 (about, across, along, around, back, by, down, in, off, on, out, over, round, through, under, up) によって構成されているものだけを取り扱っている。したがって、それら以外の動詞、すなわち例えば keep からなる keep up などの句動詞等は除外されている。他方 Liu (2011) はこれらの不備を指摘し前者で見落とされたものを含む150もの高頻出句動詞を取り上げている。一方 Waibel (2007) は大学生の句動詞の使用状況を母語話者と非母語話者の観点から比較して分析している。しかし前述したように非母語話者の分析対象はドイツ人とイタリア人を主としており、日本人は取り上げられていない。また Biber et al. (1999)、Gardner and Davies (2007) の両者はBNCコーパスのみをデータとして使用しておりイギリス英語に偏っているが、Liu (2011) はアメリカ英語を取り扱った COCA コーパスも使用しイギリス英語とアメリカ英語の両者を対比しながら調査している。しかし Liu (2011) もイギリス英語とアメリカ英語をレジスターごとに分析しているが、レンマ化された句動詞のみを取り扱っており語形変化のある時制や複数の意味を持つ多義的な句動詞の意味分析は行われていない。

2.1. HMC コーパスにおける高頻出句動詞

谷他 (2001) は1980~90年代のハリウッド映画122タイトルの映画字幕シナリオを収録したハリウッド映画字幕コーパス Hollywood Movie Corpus (以下 HMC) を用いてその中で使用されている句動詞の使用頻度を調査している。句動詞は前述した10の基本動詞と16の不変化詞から成るものである。表1は91句動詞の内上位24位までのものを列挙している。

表1 HMCにおける高頻出句動詞 (数字は順位、以下同様)

| | | | | | | | | | |
|----|----------|----|-----------|----|-----------|----|----------|----|-----------|
| 1 | come on | 2 | get out | 3 | go on | 4 | get back | 5 | come in |
| 6 | get in | 7 | get up | 8 | come back | 9 | go up | 10 | go back |
| 11 | get off | 12 | hold on | 13 | get down | 14 | go out | 15 | come up |
| 16 | take out | 17 | come out | 18 | take off | 19 | put on | 20 | come over |
| 21 | go down | 22 | come down | 23 | go in | 24 | go over | 24 | get away |

ここでは映画のスク립トから抽出されたこともあり談話標識としての come on という句動詞が特に多く get、go、come から構成される句動詞が多くを占めるという特徴がある。

2.2. BNC コーパスにおける高頻出句動詞

Biber et al. (1999, pp. 409-410) は高頻出句動詞を 31 個取り上げている。これらは BNC コーパスによるもので会話、フィクション、ニュース、学術論文の 4 つのレジスターに分けられ大まかな使用状況が示されている。しかしその数値は明確ではない。また句動詞は動詞に準じて (1) の 7 つのタイプに分類されている。ただし動詞の場合には help、let、require など、前置詞付き動詞には call for などの使役 (causative) 動詞のタイプの例が取り上げられているが、句動詞では使用頻度が少ないためこのタイプが一例も示されていないなど詳細な分析はなされていない。

(1) Biber et al. (1999) による 31 の高頻出句動詞の分類

- a. 動作自動詞 (action intransitive) — come on, get up, sit down, get out, come over, stand up, go off, shut up, sit up, go ahead
- b. 動作他動詞 (action transitive) — get in, pick up, put on, make up, carry out, take up, take on, get off, look up, set up, take off, take over
- c. 心理他動詞 (mental transitive) — find out, give up
- d. 伝達他動詞 (communication transitive) — point out
- e. 生起他動詞 (occurrence intransitive) — come of, run out
- f. 繫辞動詞 (copular) — turn out
- g. 相自動詞 (aspectual intransitive) — go on

また Gardner and Davies (2007) は分析対象を 20 個のよく使われる動詞と 16 個の不変化詞に絞り BNC コーパスを用いて紙面の都合で本論文末にある付表 A のように 100 個の高頻出句動詞を示している。

2.3. BNC と COCA コーパスにおける高頻出句動詞の比較

Liu (2011) は COCA コーパスと BNC コーパスの両者を用いてアメリカ英語とイギリス英語とを比較している。COCA コーパスは会話、フィクション、雑誌、新聞、学術論文の 5 つのレジスターで構成されている。高頻出句動詞は各々上位 150 のものが提示されているが、ここでは便宜上上位 25 位までのものだけを次の表 2、表 3 に示している。

表 2 COCA によるアメリカ英語の高頻出句動詞

| | | | | | | | | | |
|----|------------|----|----------|----|-----------|----|-----------|----|---------|
| 1 | go on | 2 | pick up | 3 | come back | 4 | come up | 5 | go back |
| 6 | find out | 7 | come out | 8 | go out | 9 | point out | 10 | grow up |
| 11 | set up | 12 | turn out | 13 | get out | 14 | come in | 15 | take on |
| 16 | give up | 17 | make up | 18 | end up | 19 | get back | 20 | look up |
| 21 | figure out | 22 | sit down | 23 | get up | 24 | take out | 25 | come on |

表3 BNCによるイギリス英語の高頻出句動詞

| | | | | | | | | | |
|----|-----------|----|-----------|----|----------|----|-----------|----|-----------|
| 1 | go on | 2 | set up | 3 | pick up | 4 | go back | 5 | come back |
| 6 | go out | 7 | point out | 8 | find out | 9 | come up | 10 | make up |
| 11 | take over | 12 | come out | 13 | come on | 14 | come in | 15 | go down |
| 16 | work out | 17 | set out | 18 | take up | 19 | get back | 20 | sit down |
| 21 | turn out | 22 | take on | 23 | give up | 24 | carry out | 25 | get up |

Liu (2011)

両者とも go on が最も多く使われている。¹⁾ ここで両コーパスによるアメリカ英語とイギリス英語において句動詞の使用頻度の違いが大きかったものは次の表4のようにになる。表中の () 内の数字は Liu (2011) が調査した表中の頻度の順位を基に COCA と BNC との順位の差を表しており数値が大きいほど頻度の順位に差があることになる。数字の前にマイナス (-) の記号が付いている場合はイギリス英語の方の頻度が高く、付いていない場合はアメリカ英語の方が高いことを示している。

表4 アメリカ英語とイギリス英語で使用頻度の差が大きい句動詞

| | | | | | | | |
|----|------------------|----|-----------------|----|-------------------|----|-----------------|
| 1 | figure out(126) | 2 | sort out(-99) | 3 | show up(92) | 4 | get on(-88) |
| 5 | fill in(-87) | 6 | check out(79) | 7 | shut down(77) | 8 | lay out(75) |
| 9 | carry on(-73) | 10 | hand over(-72) | 11 | hang out(60) | 11 | go a/round(-60) |
| 13 | bring about(-59) | 14 | hang up(58) | 15 | come a/round(-57) | 16 | build up(-56) |
| 17 | throw out(55) | 17 | close down(-55) | 19 | pass on(-53) | 19 | write down(-53) |
| 21 | call out(52) | 22 | start out(50) | 23 | set off(-49) | 24 | set out(-47) |
| 24 | pay off(47) | | | | | | |

2.4. LOCNESS、G-ICLE、I-ICLEコーパスにおける高頻出句動詞の比較

Waibel (2007) は The Louvain Corpus of Native English Essays (LOCNESS) を用いて母語話者の大学生のエッセイを分析し、その中で使われている高頻出の句動詞を以下のように示している。

表5 LOCNESSによる母語話者の大学生の高頻出句動詞

| | | | | | | | | | |
|----|----------|----|-----------|----|-----------|----|----------|----|-------------|
| 1 | go on | 2 | carry out | 3 | point out | 4 | take out | 5 | bring up |
| 6 | take on | 7 | end up | 8 | grow up | 9 | give up | 10 | bring about |
| 11 | find out | 12 | make up | 13 | set up | 14 | go back | 15 | break down |
| 16 | get away | 17 | cut off | 18 | be out | 19 | bring in | 20 | carry on |
| 21 | go out | 22 | run up | 23 | turn out | 24 | fit in | 25 | get out |

Waibel (2007)

またドイツ人大学生の学習コーパスである G-ICLE 及びイタリア人大学生の I-ICLE も調査して表6、表7のように母語話者と非母語話者の高頻出句動詞の頻度を比較している。

表6 G-ICLE によるドイツ人大学生の高頻出句動詞

| | | | | | | | | | |
|----|----------|----|-----------|----|-----------|----|-----------|----|----------|
| 1 | find out | 2 | go on | 3 | give up | 4 | turn out | 5 | get up |
| 6 | go out | 7 | point out | 8 | wake up | 9 | come back | 10 | bring up |
| 11 | go back | 12 | carry out | 13 | be away | 14 | put on | 15 | be over |
| 16 | end up | 17 | sum up | 18 | take over | 19 | come up | 20 | get out |
| 21 | sit down | 22 | stand up | 23 | take up | 24 | take out | 25 | be back |

Waibel (2007)

表7 I-ICLE によるイタリア人大学生の高頻出句動詞

| | | | | | | | | | |
|----|-------------|----|-----------|----|---------------|----|----------|----|-------------|
| 1 | grow up | 2 | bring up | 3 | go on | 4 | give up | 5 | point out |
| 6 | make up | 7 | carry out | 8 | find out | 9 | keep on | 10 | build up |
| 11 | turn out | 12 | carry on | 13 | go out | 14 | come out | 15 | come back |
| 16 | sum up | 17 | take away | 18 | end up | 19 | go back | 20 | bring about |
| 21 | put forward | 22 | come up | 23 | link together | 24 | be away | 25 | fall down |

Waibel (2007)

2.5. まとめ

本節では高頻出の句動詞の例をこれまでの先行研究を基に提示した。その中でアメリカ英語とイギリス英語、また母語話者と非母語話者（ドイツ人、イタリア人学習者）における句動詞を各々個別に取り上げて具体的に示した。これらのデータはハリウッド映画字幕コーパスである HMC、母語話者のコーパスである BNC、COCA、及び母語話者の大学生コーパスである LOCNESS、また非母語話者による大学生の学習者コーパスである G-ICLE 及び I-ICLE に基づいている。各コーパスを使ったこれらの事例から、コーパスによって高頻出の句動詞には共通しているものと若干異なっているものがあることが明らかとなった。本研究ではさらにこれら以外の複数の学習者コーパスを用いることによって日本人学習者の句動詞の使用がどのようにコーパスによって違っているのかより詳細に調べていきたい。

3. 研究方法

前節の先行研究では、母語話者及びドイツ人、イタリア人学習者による英語の句動詞の使用状況を概括した。本節では本研究における日本人学習者による句動詞の使用状況の調査の研究方法を提示する。

本研究では日本人の中学・高校生による自由英作文のコーパスである JEFLL コーパスを主に使い、参考として 1700 万語の英語及び 22 の理系分野からなる日本人学術論文コーパスの PERC コーパス、及び日本人大学生による英作文を扱った NICE コーパスを部分的に用いて、高頻度句動詞の使用状況を調査する。そして母語話者のコーパスである COCA コーパスにおける話し言葉及び学術分野のレジスターを使って、話し言葉と書き言葉の使用状況も比較する。PERC コーパスは理系分野のコーパスであり使用の傾向が偏っている可能性があるが、本研究ではあえてその使用語彙の特徴を調べ学習者の間の違いを示すことで各コーパスの特徴がより鮮明になると考え取り上げている。

調査では母語話者の他に非母語話者間の句動詞の使用状況の違いを調べるため、母語話者と非母語

話者の学習者コーパスを調査した Waibel (2007) の LOCNESS、G-ICLE、及び I-ICLE のデータと比較する。またこの他に母語話者の大学生とアジア系の非母語話者の大学生の英作文を比較している ICNALE (International Corpus Network of Asian Learners of English) コーパスを用い、母語話者と他の非母語話者の句動詞の使用状況をさらに詳しく調べる。なお調査はそれぞれのコーパスに付属した共起頻度検索ツールを使用して行う。ただし NICE コーパスについては検索ツールの AntConc を使用し、以下の表にある LOCNESS、G-ICLE、及び I-ICLE の各データは、Waibel (2007) のものを引用している。

4. 分析結果

JEFLL コーパスと PERC コーパスを用いて句動詞の頻度を調査した結果は以下の表 8、表 9 のようになった。

表 8 JEFLL による日本人中高生の高頻出句動詞

| | | | | | | | | | |
|----|-------------|----|----------|----|-----------|----|-----------|----|-----------|
| 1 | get up | 2 | take out | 3 | wake up | 4 | come back | 5 | run away |
| 6 | bring out | 7 | give up | 8 | go back | 9 | go out | 10 | break out |
| 11 | fall down | 12 | grow up | 13 | carry out | 14 | sell out | 15 | break out |
| 16 | look around | 17 | get back | 18 | go away | 19 | go down | 20 | go on |
| 21 | stand up | 22 | sit down | 23 | cry out | 24 | look back | 25 | look up |

表 9 PERC による高頻出句動詞 (数値は実数)

| | | | | | | | | |
|----|-----------|------|----|-----------|-----|----|-------------|-----|
| 1 | carry out | 3124 | 2 | point out | 520 | 3 | make up | 338 |
| 4 | turn out | 284 | 5 | set up | 233 | 6 | rule out | 197 |
| 7 | take up | 176 | 8 | build up | 144 | 9 | bring about | 136 |
| 10 | cool down | 136 | 11 | take on | 136 | 12 | break down | 111 |
| 13 | go on | 110 | 14 | slow down | 110 | 15 | take over | 83 |
| 16 | follow up | 78 | 17 | end up | 75 | 18 | set out | 74 |
| 19 | open up | 71 | 20 | occur in | 71 | 21 | fill in | 65 |
| 22 | pick up | 65 | 23 | find out | 58 | 24 | break up | 56 |
| 25 | speed up | 56 | 25 | turn off | 56 | | | |

表 9 で示したように、日本人大学生等による科学論文を対象とした PERC コーパスの中で最も高頻度で使われていた句動詞は carry out であった。これは母語話者の大学生のエッセイである LOCNESS で使われている頻度の値とほぼ同等であった。日本人大中高生による JEFLL コーパスでは句動詞の中で上位 13 位の位置を占めているが、実数 (頻度) は表 10 に示されているように carry が比較的によく使われているのに対して類義語の perform と同様それほど多く使われていない。一般の日本人大学生コーパスである NICE コーパスにおいても同じ傾向が見られ、これらの使用頻度はいずれも高くはない。

表10 carry out と perform

| | PERC | JEFLL | NICE |
|-----------|------------------------|-----------------------|--------------------|
| carry out | 3124(192.65/1 M words) | 33(49.31/1M words) | 8(69.01/1 M words) |
| perform | 7848(483.97/1 M words) | 24(35.86/1 M words) | 1(8.63/1 M words) |
| carry | 4105(253.14/1 M words) | 105(156.88/1 M words) | 9(77.64/1 M words) |

同様に表 11 において句動詞 bring about とその類義語である cause をコーパスで比較してみた。²⁾ 母語話者の大学生のコーパスである LOCNESS、ドイツ人の大学生コーパスの G-ICLE、イタリア人の大学生コーパス I-ICLE に比べて日本人大学生等の PERC や NICE、日本人中高生の JEFLL における使用頻度はいずれも低く、PERC や NICE コーパスにおける cause の使用頻度が母語話者のコーパスの値にやや近い以外はかなり頻度に差がある。

表11 bring about と cause

| | LOCNESS | G-ICLE | I-ICLE | PERC | JEFLL | NICE |
|-------------|---------|--------|--------|--------|-------|--------|
| bring about | 87 | 33 | 26 | 8.33 | 2.99 | 8.63 |
| cause | 492 | 368 | 596 | 354.53 | 56.78 | 353.69 |

次に表 12 において句動詞 point out、carry out を比較した。PERC コーパスで carry out が母語話者と同等に使われている以外、日本人のコーパスの使用頻度はいずれもかなり低い。句動詞 point out は carry out の次に多く PERC コーパスで使われているものであるが、使用頻度は 32.07 であり欧米のコーパスにおける頻度とは大きな差がある。また句動詞 point out は日本人中高生には使用が限られており、JEFLL コーパスの中では全く使われていなかった。

表12 point out と carry out

| | LOCNESS | G-ICLE | I-ICLE | PERC | JEFLL | NICE |
|-----------|---------|--------|--------|--------|-------|-------|
| point out | 155 | 99 | 117 | 32.07 | 0 | 51.76 |
| carry out | 182 | 78 | 86 | 192.65 | 49.31 | 69.01 |

表13 go on と continue

| | LOCNESS | G-ICLE | I-ICLE | PERC | JEFLL | NICE |
|----------|---------|--------|--------|-------|-------|--------|
| go on | 148 | 120 | 190 | 7.03 | 47.81 | 69.01 |
| carry on | 42 | 12 | 48 | 1.23 | 2.99 | 0 |
| keep on | 0 | 25 | 61 | 2.71 | 8.96 | 8.63 |
| continue | 515 | 91 | 177 | 84.61 | 53.79 | 258.79 |

同様に表 13 において continue とほぼ同じ意味を持つ句動詞についても Waibel (2007) の LOCNESS、G-ICLE、及び I-ICLE のデータと比較してみた。ここでも LOCNESS における句動詞 keep on の母語話者の使用が全くなかった点を除いて、日本人学習者の句動詞の使用頻度はいずれも

かなり低いことが分かる。

ここで表 10～13 における一部を除いた語彙について、日本人学習者コーパス間及び母語話者の学習者コーパスとの対数尤度比を P. Rayson による Log-likelihood calculator を使って求めてみると論文末の付表 B のようになった。対数尤度比 (log-likelihood score) は、LLS、G スコア、G₂ スコアなどと呼ばれることもあり、コロケーションを検出する際に最もバランスのとれた指標であると定義されている。また頻度情報を十分考慮した数値を表し、粗頻度の順位に似た結果が得られるとされている。

付表 B における対数尤度比を特に数値の大きい順に挙げると PERC コーパスと JEFLL コーパスの間の perform (462.41)、cause (251.75)、LOCNESS と PERC コーパス間の continue (244.58)、go on (240.92)、LOCNESS と JEFLL コーパスの間の continue (186.19)、point out (106.21)、PERC と JEFLL コーパスの間の carry out (98.64)、perform (96.72)、LOCNESS と JEFLL コーパスの間の go on (72.80)、LOCNESS と PERC コーパスの間の point out (65.38)、bring about (65.06)、JEFLL と NICE コーパスの間の cause (62.26) であった。

JEFLL コーパスは日本人中高生の英作文コーパスである。英作文のテーマは breakfast、dream、earthquake、festival、otoshidama、urashima の 6 つのトピックから構成されている。使われている句動詞はそのトピックに影響されることが予想される。そこで JEFLL コーパスにおいて高頻度句動詞が 6 つのトピックにおいて実際にどのくらい使用されているのかを調査してみた。次の表 14 の中の各項目の上段の数値は実数、下段は 100 万語当たりの頻度数を表す。

表 14 から分かるようにトピックによって用いられる句動詞に偏りが見られる。get up や wake up は breakfast や dream、urashima のトピックで多く使われている。take out、bring out、break out、carry out などは earthquake のトピックでのみ多く使われており他ではほとんど使われていない。また sell out は festival で多く使われ、give up は urashima で多いという特徴がある。トピックとよく使われる句動詞をまとめると次の (2) のようになる。

(2) JEFLL コーパスにおけるトピックとよく使われる句動詞

- a. breakfast — get up, wake up
- b. dream — wake up, get up, run away, fall down
- c. earthquake — take out, bring out, break out, run away, carry out
- d. festival — sell out
- e. otoshidama — go out, grow up
- f. urashima — come back, go back, give up, wake up, get up

このように使用される句動詞は題材の内容と関連して使われていることが分かる。したがって、一つ特定のコーパスだけに絞らず複数の異なる分野のコーパスを比較・調査することは、各々のコーパス・データとそのコーパスの調査内容 (テーマやトピック) との関連性をより客観的で明確に知ることができる点で意義があるように思われる。

表14 JEFLL コーパスにおけるトピック毎の句動詞の使用頻度

| | | breakfast | dream | earthquake | festival | otoshidama | urashima |
|----|-----------|----------------|----------------|----------------|--------------|--------------|----------------|
| 1 | get up | 507 3692.39 | 174 2238.2 | 6 47.22 | 4 24.75 | 2 25.54 | 23 263.57 |
| 2 | take out | 0 0 | 6 77.19 | 686 5398.56 | 1 6.19 | 0 0 | 2 22.92 |
| 3 | wake up | 96 699.24 | 258 3319.18 | 3 23.61 | 4 24.75 | 2 25.54 | 28 320.87 |
| 4 | come back | 3 21.85 | 23 295.90 | 13 102.31 | 5 30.94 | 1 12.77 | 127 1455.35 |
| 5 | run away | 0 0 | 85 1093.53 | 76 598.09 | 0 0 | 0 0 | 8 91.68 |
| 6 | bring out | 0 0 | 0 0 | 139 1093.38 | 0 0 | 0 0 | 0 0 |
| 7 | give up | 5 36.42 | 2 25.73 | 6 47.22 | 8 49.50 | 4 51.08 | 75 859.46 |
| 8 | go back | 0 0 | 5 64.33 | 3 23.61 | 2 12.37 | 2 25.54 | 89 1019.89 |
| 9 | go out | 6 43.70 | 25 321.63 | 37 291.18 | 5 30.94 | 11 140.47 | 12 137.51 |
| 10 | break out | 0 0 | 1 12.87 | 80 629.57 | 0 0 | 0 0 | 0 0 |
| 11 | fall down | 0 0 | 42 540.33 | 2 15.74 | 1 6.19 | 0 0 | 8 91.68 |
| 12 | grow up | 8 58.27 | 3 38.60 | 7 55.09 | 3 18.56 | 9 114.93 | 11 126.05 |
| 13 | carry out | 1 7.28 | 0 0 | 30 236.09 | 2 12.37 | 0 0 | 1 11.46 |
| 14 | sell out | 0 0 | 0 0 | 0 0 | 27 167.06 | 1 12.77 | 2 22.92 |
| 15 | make up | 4 29.14 | 2 25.73 | 2 15.74 | 12 74.25 | 1 12.77 | 7 80.22 |

また JEFLL コーパスは中学 1 年から高校 3 年までの 6 学年のサブコーパスに分けられる。そこで次に学年ごとに句動詞の使用頻度がどのように変わるのかを調べた。次の表 15 がその結果である。ここでの数値は 100 万語当たりの使用頻度を表している。

表15 JEFLL コーパスにおける学年ごとの句動詞の使用頻度

| | | 中1 | 中2 | 中3 | 高1 | 高2 | 高3 |
|----|-----------|-----|------|------|------|------|-----|
| 1 | get up | 352 | 1515 | 1792 | 1053 | 639 | 506 |
| 2 | take out | 0 | 651 | 917 | 1098 | 2099 | 317 |
| 3 | wake up | 39 | 307 | 1070 | 417 | 774 | 557 |
| 4 | come back | 78 | 238 | 425 | 88 | 270 | 329 |
| 5 | run away | 20 | 169 | 450 | 55 | 399 | 190 |
| 6 | bring out | 0 | 31 | 127 | 33 | 610 | 152 |
| 7 | give up | 156 | 225 | 144 | 154 | 82 | 139 |
| 8 | go back | 20 | 100 | 238 | 77 | 147 | 304 |
| 9 | go out | 0 | 100 | 161 | 121 | 199 | 203 |
| 10 | break out | 0 | 6 | 59 | 55 | 264 | 291 |
| 11 | fall down | 0 | 69 | 110 | 77 | 59 | 152 |
| 12 | grow up | 0 | 38 | 93 | 66 | 70 | 76 |
| 13 | carry out | 0 | 0 | 0 | 11 | 41 | 329 |
| 14 | sell out | 0 | 6 | 17 | 88 | 47 | 139 |
| 15 | make up | 0 | 13 | 42 | 33 | 70 | 76 |

表15から分かるように中1では使われる句動詞の種類が限られ数も少ないが、学年が上がるにつれて種類が多くなりまた使われる数も増えていくことが分かる。句動詞 carry out は中学生では使用がなく高校になって初めて使われ始め、高校3年の時にピークを迎える。get up や give up などの中1からすぐ使われ始めて、中2や中3には使用がピークとなっている。中2から高2までは多く使われる句動詞と少ないものとの差が大きいが、高3になるとその差が少なくなり平均化している。

次の表16は投野(2007, p.40)を基に学年毎に使用される動詞の中での副詞的不変化詞の割合を求めたものである。前述したように投野(2007)は句動詞の頻度を直接は分析していないが副詞的不変化詞が全て句動詞を構成して使用されていると仮定すると、中1は0.5%と使用される句動詞の割合はかなり低いが高2以降はいずれも2.6%以上あり、平均するとJEFLLコーパスの中での動詞に占める句動詞の割合はおおよそ2.9%になると推測される。

表16 JEFLL コーパスにおける学年別の句動詞を構成する品詞分布

| | 中1 | 中2 | 中3 | 高1 | 高2 | 高3 | 平均 |
|------------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 動詞(A) | 18.3% | 19.4% | 20.0% | 19.0% | 19.1% | 19.3% | 19.2% |
| 副詞的不変化詞(B) | 0.1% | 0.5% | 0.7% | 0.6% | 0.8% | 0.6% | 0.6% |
| B/A | 0.5% | 2.6% | 3.5% | 3.2% | 4.2% | 3.1% | 2.9% |

次に表17においてLOCNESS、JEFLL、PERC、NICE、COCA(学術分野、話し言葉)の5つのコーパスを使って母語話者と非母語話者の句動詞の使用頻度を比較してみた。

表17 LOCNESS、JEFLL、PERC、NICE、COCA (学術分野)、COCA (話し言葉) コーパスにおける句動詞の使用頻度の比較

| 順位 | LOCNESS | | JEFLL | PERC | NICE | COCA (学術) | COCA (話し言葉) |
|----|-------------|---------|---------|---------|---------|--------------|----------------|
| | 句動詞 | 100万語頻度 | 100万語頻度 | 100万語頻度 | 100万語頻度 | 100万語頻度 | 100万語頻度 |
| 1 | go on | 201 | 47.81 | 6.78 | 69.01 | 52.55 | 316.37 |
| 2 | carry out | 182 | 50.80 | 192.65 | 69.01 | 62.25 | 26.48 |
| 3 | point out | 155 | 0 | 32.07 | 51.76 | 90.72 | 79.13 |
| 4 | take away | 117 | 8.96 | 0 | 17.25 | 8.28 | 38.18 |
| 5 | bring up | 110 | 0 | 1.17 | 43.13 | 8.14 | 44.72 |
| 6 | take on | 102 | 5.98 | 8.39 | 17.25 | 48.51 | 71.67 |
| 7 | end up | 98 | 0 | 4.63 | 25.22 | 20.38 | 82.44 |
| 8 | grow up | 98 | 61.26 | 1.11 | 163.90 | 22.57 | 89.25 |
| 9 | give up | 95 | 149.41 | 1.48 | 103.52 | 23.76 | 65.31 |
| 10 | bring about | 87 | 2.99 | 8.33 | 8.63 | 27.44 | 10.72 |
| 11 | find out | 72 | 8.96 | 3.58 | 86.26 | 22.35 | 162.08 |
| 12 | make up | 68 | 41.84 | 20.84 | 17.25 | 46.91 | 54.35 |
| 13 | set up | 64 | 4.48 | 14.37 | 17.25 | 32.83 | 67.62 |
| 14 | go back | 61 | 149.41 | 2.78 | 60.39 | 19.74 | 190.98 |
| 15 | break down | 53 | 13.45 | 6.85 | 0 | 17.55 | 19.91 |
| 16 | get away | 53 | 2.99 | 0 | 0 | 3.00 | 45.11 |
| 17 | cut off | 45 | 1.49 | 2.41 | 0 | 7.65 | 20.49 |
| 18 | be out | 45 | 7.47 | 0.49 | 0 | 2.14 | 976.12 |
| 19 | bring in | 42 | 0 | 1.05 | 0 | 11.71 | 38.97 |
| 20 | carry on | 42 | 2.99 | 1.43 | 0 | 8.86 | 11.55 |
| 21 | go out | 42 | 143.44 | 0.43 | 172.53 | 9.62 | 129.91 |
| 22 | run up | 42 | 1.49 | 0.19 | 8.63 | 0.66 | 4.60 |
| 23 | turn out | 42 | 2.99 | 17.51 | 8.63 | 33.39 | 82.87 |
| 24 | fit in | 38 | 0 | 0.49 | 0 | 2.37 | 4.71 |
| 25 | get out | 38 | 13.45 | 0.31 | 0 | 6.92 | 122.05 |

表17から分かるように、母語話者の大学生のコーパスであるLOCNESSと比較して日本人中高生コーパスのJEFLLや日本人大学生コーパスのNICEではgive up、go back、go out、grow upという特定の句動詞が多く使われているが、それら以外は使われる頻度はいずれもかなり低い。日本人大学生等のコーパスであるPERCにおいても同様にcarry out以外使用頻度はかなり低い。ここではPERCが理系の論文のコーパスであるために、会話でよく使われる句動詞が少ないことも影響していると思われる。しかしCOCAコーパスの学術論文のレジスターにおける句動詞の使用頻度と比較しても、句動詞の使用は一般に母語話者の方が多という指摘が実際そうであることは明らかであ

る。さらに COCA コーパスの話し言葉のレジスターと比べると、母語話者も全般に話し言葉の方が句動詞をより高い頻度で使う傾向が見られるが、carry out や point out、bring about 等のように話し言葉よりも学術分野のような書き言葉において、逆により高頻度で使用する特定の句動詞があることが分かる。³⁾

同様に母語話者と非母語話者の句動詞の使用頻度を ICNALE (International Corpus Network of Asian Learners of English) コーパスを使って調べてみた。ICNALE コーパスは母語話者とアジア系の非母語話者の大学生の英作文を比較の対象としている。トピックは喫煙問題とアルバイトの2つのみであり、20~40 分で書かれた 200~300 の単語からなるエッセイのコーパスである。紙面の都合で論文末にある付表 C は ICNALE コーパスにおける母語話者 (NS) と非母語話者 (中国、香港、インド、日本、韓国、パキスタン、タイ、台湾) の句動詞の使用状況を示している。

これと関連して ICNALE コーパスにおける母語話者 (NS) と前述したアジア系の非母語話者の動詞の使用数と後続の語句の種類も調べてみた。付表 D がその結果である。⁴⁾

5. 考察

歴史的には句動詞で使われている動詞の多くはドイツ語と同じ起源を持ち、またドイツ語には句動詞と同じではないが句動詞に対応する動詞 (ausgehen (=go out) 等の分離動詞) が文法的に存在している。このことを考慮して Waibel (2007) は G-ICLE の中で使われている動詞の中のゲルマン系とラテン系起源の動詞の割合を調べ、ゲルマン系起源のものの割合が高いことを示し、ドイツ人学習者が母語であるドイツ語の影響からゲルマン系起源の動詞を主とする句動詞を母語話者以上に多用していると論じている。そして G-ICLE の動詞の中で句動詞が使用されている割合を調査し、その割合が母語話者のコーパスである LOCNESS よりも実際に高いことを量的分析によって明らかにしている。一方日本人学習者の場合、表 16 で示したように JEFLL コーパスに限れば使われる句動詞の割合は Waibel (2007) が調べたイタリア人学習者の I-ICLE の値とほぼ同じであり、母語話者のものよりはかなり低い。(LOCNESS 4.7%、G-ICLE 6.2%、I-ICLE 2.9%、JEFLL 2.9%)

表 10~13 では carry out、point out、bring about、go on などの句動詞とそれに対応する動詞の使用頻度を母語話者のコーパスと非母語話者の学習者コーパスとを比較している。その結果、これらの句動詞に関する限り、母語話者と比べて日本人等の非母語話者は句動詞の使用頻度が低い傾向にあることが分かる。⁵⁾ Waibel (2007) はドイツ人学習者については母語話者よりも句動詞を過剰使用する傾向があることを指摘しているが、ここで取り上げた句動詞に関する限りドイツ人学習者の句動詞の使用頻度は母語話者より低い。前述したようにドイツ人学習者の全体の句動詞の使用の割合が母語話者よりも高いことから、ドイツ人学習者は表 6 に示されているように母語話者とは異なる他の句動詞をより好んで使用していることが分かる。これらは表 7 におけるイタリア人学習者、表 8、表 9 における日本人学習者のものとも若干異なっており、非母語話者の間でもよく使用する句動詞は異なっている。

次に表 15 から分かるように日本人学習者は中学・高校と学年が上がり語彙力が付くにつれて使用する句動詞の種類も偏ることなく多様になっている。さらに表 16 から分かるように、動詞の中に占める句動詞の割合も学年を追って多少の増減はあるが増える傾向が見られる。しかし高校 3 年では句動詞の使用は平均化しているが使用割合はそれ程増えておらず、表 17 のコーパス分析からも分かる

ように、大学生以上になっても日本人学習者は全般に句動詞の使用が母語話者よりかなり少ない傾向は変わっていない。この原因の一つは基礎語彙を含めた語彙力の不足にあると思われるが、日本人学習者は句動詞をもっと多様でより多く使用するよう学習の早い段階から多義性を持つ基礎語彙の理解を十分深め、基本動詞を中心とした学習方法を工夫すべきであると思われる。このことは表 11、12、13 などから日本人以外の非母語話者についてもほぼ共通している。さらに中高生と大学生の違いという学習段階の違いばかりでなく、話し言葉と書き言葉の違い、コーパスのテーマなど使用分野の違いによって、母語話者と同様に日本人学習者においても使用する句動詞が異なっていることが、複数のコーパスの調査結果を比較することによって明らかとなった。

また付表 B の分析結果を見る限り、母語話者は句動詞 go on や take on、end up を比較的によく使用しているが、他の非母語話者はいずれもそれらの使用が少ないことが分かる。特に日本人学習者は carry out、go back、grow up、give up という特定の句動詞を母語話者とほぼ同等に使用しているが逆に point out や take away などはいくらか少ない。このように使われやすい句動詞は母語話者と非母語話者とは若干異なっている。母語話者が非母語話者に比べて好んで使う句動詞は go on、take on、end up などであり、句動詞をより効果的に非母語話者が学習できるようにするために、母語話者の使用状況をこのように詳細に調査した上で学習する句動詞を精選してもよいのではないだろうか。

使用する動詞に関しては付表 C で示したように go、come、get、say を最も多く使っているのは日本人学習者で、bring、take、show を多く使用しているのは中国人学習者である。タイ人学習者は make を多用している。ここではタイ人学習者は make money という表現を多用していた。このことから言語的な側面ばかりでなく文化的な背景も動詞の使用に影響しているのではないかということが推測される。第 2 言語習得に母語の影響があることは Gass & Selinker (1983)、奥田 (2005) が指摘しているが、母語の文化的な背景が第 2 言語の使用にどこまで影響するかなどは現時点では憶測の域を出ず、今後のさらなる調査・研究を要する検討課題である。また日本人学習者の go、come、get などの多用はこれらが他の動詞より定着しており使用しやすいからではないかとも思われる。この他に動詞 go の後に来る語句の種類割合は日本人学習者が最も少なく、日本人学習者は go の後は同じ形式の語句を多用していることが分かる。さらに動詞 say を多用し句動詞 point out の使用が少ないことから point out の意味で say を代用していることなども推測されるが、現段階ではいずれも深く調査・研究できておらず今後の課題として残されている。⁴⁾

句動詞は限られた数の動詞と不変化詞（副詞または前置詞）の組み合わせからなる。しかし意味的には一語動詞と置き換えられることもあれば抽象的で多義になることもあるなど、複雑で分かりづらく、その組み合わせも限られているとはいえ広範である。また本論文では扱わなかったが、前置詞付き動詞を句動詞と同じ枠組みで同じように取り扱ってよいかどうかも分かっていない。冠詞と同様に前置詞の使用を苦手とする日本人学習者は反復したり理解を深めたりする時間が他の文法項目以上に必要であると思われる。

このように、母語話者に比べて日本人等の非母語話者は、L1 である母語の影響を受け、ドイツ人学習者の場合を除いて句動詞の使用が実際に少ない傾向が見られた。したがって句動詞の使用を促すために句動詞の語彙学習としての側面を考えると、学習者には一層の興味付けや、母語話者がよく使用するものを中心に句動詞を精選するなどして苦手意識を持たせないように句動詞を学習する上での

負担を減らす配慮が望まれる。具体的には中学・高校の早い段階では話し言葉、高校から大学では書き言葉、などのように学習する目的に配慮した活動が行えるように、高頻度の句動詞を学習段階に応じて習得が容易なものからレジスター毎に細分化するなどして学習する教材を工夫してもよいように思われる。そして学習する際は、その語彙の明確なイメージを把握した上で様々な活動を通して実際に使用したり、幅広い文脈の中で理解したりすることが大切であると考えられる。このことに関して、中村（2012）は基本語彙のコア・イメージから意味を拡張させる方略の利点を提示し、丸暗記中心の学習法は句動詞の習得に結び付いていないことを示唆している。平野（2000）も語彙学習に影響を及ぼす主要な因子を反復・体得重視、イメージ化、興味・嗜好優先、音声反復の4因子に分け、音声反復以外は学力差や性差によって語彙学習方略の使用の認識が異なることを調査によって示している。

6. おわりに

本論文では学習者コーパスにおける使用頻度という観点から句動詞及び一部の基本動詞を取り上げた。そして複数の学習者コーパスを比較・分析することによって、非母語話者である日本人学習者の句動詞の使用頻度は母語話者よりも全般に低いが、母語話者と同様に日本人学習者もコーパスの調査対象や調査する分野などによって、よく使う語彙が違っていることが分かった。先行研究では多くの高頻度の句動詞が示されていたが、調査する分野を絞ったさらに細かい分析が必要となるように思われる。またコーパスを用いた句動詞の使用状況に関して、母語話者、非母語話者の一般的な使用の傾向にも触れたが、今後、さらに調査・分析することが求められる。その際、コア・イメージなどの学習方略を含めた基本語彙習得の側面から、詳細な分析を行う必要があるように思われる。また句動詞と前置詞付き動詞との関係についても、言語習得の過程を考慮するなどして調べていきたい。

本論文で行なったコーパスを利用した調査は大規模にデータを収集・分析することから、句動詞のようなあまり一般的でない言語現象を取り扱う際には問題があることが指摘されている（Mönnink 1997; Aats 1991）。したがって、コーパスで得られたデータを補完するために文法性を判断する誘発性テスト (elicitation test) を被験者に課すことによって、より妥当性の高い分析・結果が得られると思われる。また語法の調査においては直感による文法性の判断テストは必須であることはこれまで度々言われてきた (Quirk and Svartvik, 1979)。Gilquin and Gries (2009) もこのような文法の容認可能性は内省的な文法性判断から得られることを指摘している。本論文では紙面の都合で少し触れる程度であったが、このようなコーパス以外の文法性判断テスト等の方法も検討して部分的に導入してみたい。

注

*本研究に使用したデータは、投野由紀夫氏を中心として構築された中高生の英作文コーパス Japanese EFL Learner (JEFLL) Corpus に基づくものである。検索ツールは、JEFLL Corpus の web 検索システム (小学館コーパスネットワーク) を利用した。他に使用したコーパスや検索ツールは以下のものである。

AntConc 3.2.2w. (A freeware concordance program for Windows, Macintosh OSX, and Linux)
URL: <http://www.antlab.sci.waseda.ac.jp/software.html>

BNC (British National Corpus)

URL: <http://www.corpora.jp/~scn/information.html?page=top>

COCA (The Corpus of Contemporary American English)

URL: <http://corpus.byu.edu/coca/>

G-ICLE (German Component of the International Corpus of Learner English)

In International Corpus of Learner English. Version 1.1. Louvain-la-Neuve: Presses Universitaires de Louvain. 2002.

ICNALE (International Corpus Network of Asian Learners of English)

URL: <http://language.sakura.ne.jp/s/icnale.html>

I-ICLE (Italian Component of the International Corpus of Learner English)

In International Corpus of Learner English. Version 1.1. Louvain-la-Neuve: Presses Universitaires de Louvain. 2002.

LOCNESS (The Louvain Corpus of Native English Essays)

URL: www.fltr.ucl.ac.be/fltr/germ/etan/cecl/Cecl-Projects/Icle/locness1.htm

NICE (Nagoya Interlanguage Corpus of English)

URL: <http://sugiura5.gsid.nagoya-u.ac.jp/~sakaue/nice/>

PERC (Professional English Research Consortium)

URL: http://scn.jkn21.com/~perc04/index_j.html

Paul Rayson Log-likelihood calculator : <http://ucrel.lancs.ac.uk/llwizard.html>

- 1) Liu (2011) による高頻度句動詞は概略表 2、表 3 を含めて 150 ずつ示されたが、それらの句動詞を構成する動詞と不変化詞の種類は以下のようになる。

動詞 (63) — go, come, get, take, give, make, put, find, bring, set, look, carry, hold, sit, show, work, turn, point, grow, pick, move, break, (run, cut, stand, show, figure, wake, pull, open, close, check, catch, keep, reach, clean, shut, slow, wind, line, lay, hang, pay, build, throw, hang, start, call, back, send, blow, step, play, walk, write, fill, rule, hand, sum, pass, sort, follow, settle)

不変化詞 (13(14)) — about, ahead, along, a/round, back, down, in, off, on, out, over, through, up

動詞は 63 種類、不変化詞は 13 (14) 種類であり、不変化詞については Liu (2011) 以前のものの以外のもはなく、動詞の種類が Gardner and Davies (2007) のものより () で開んだ 43 種類増えている。

- 2) 動詞 cause の同義表現としては他に句動詞 bring on (「特に病気などを引き起こす」意) もあるが、JEFLL コーパスに用例はなく、ここでは取り上げていない。
- 3) COCA (学術分野、話し言葉) コーパスの数値は主に Liu (2011) のものを使用している。
- 4) コーパスの検索ツールで実数を求めた後、その割合を計算して求めた。
- 5) ただし carry out に関しては日本人学習者の内でも理系の論文のコーパスでは使用頻度は高くなっている。
- 6) Say が 460 使用されているのに対して、その類義語である mention の使用数は 10、state の使用数は 5 と少数であった。

参考文献

- 石川慎一郎 (2008). 『英語コーパスと言語教育—データとしてのテキスト』. 東京: 大修館.
- 奥田祥子 (2005). 「第2言語習得における母語の影響」『大東文化大学紀要』. 44, 149-157.
- 杉浦正利(代表) (2008). 「英語学習者のコロケーション知識に関する基礎的研究」平成17~19年度 科学研究費補助金 (基盤研究(B)) 研究成果報告書, 課題番号17320084.
- 谷明信・堀池保昭・杉森直樹・富田かおる (2001). 「コーパスによる英語句動詞研究—応用言語学的観点から—」 Retrieved August 28, 2011, from <http://repository.hyogo-u.ac.jp/dspace/bitstream/10222/10001/1/00000101.pdf>
- 投野由紀夫 (2007). 『日本人中高生一万人の英語コーパス—中高生が書く英文の実態とその分析—』. 東京: 大修館.
- 中村俊佑 (2012). 「三語句動詞における意味形成原理とその習得に関する研究」 Retrieved January 7, 2013, from http://gakkai.sfc.keio.ac.jp/show_pdf/ORF2012-02.pdf
- 平野絹枝 (2000). 「日本人 EFL 中学生の英語語彙学習方略—英語学力と性差の影響—」 『上越教育大学研究紀要』. 19(2), 719-731.
- Aats, I. (1991). Intuition-based and Observation-based Grammars. In K. Aimer, & B. Altenberg (Eds.), *English Corpus Linguistics: Studies in honor of Ian Svartvik*, (pp. 44-62). London: Longman.
- Biber, D., Johansson, S., Leech, G., Conrad, S., & Finegan, E. (1999). *Longman Grammar of Spoken and Written English*. Longman: London.
- Gass, S., & Selinker, L. (1983). *Language Transfer in Language Learning*. Rolly, Mass.: Newbury House Publishers, Inc.
- Gardner, D., & Davies, M. (2007). Pointing out Frequent Phrasal Verbs; A Corpus-based Analysis. *TESOL Quarterly*, 41 (2), 339-359.
- Gilquin, G. & Gries, S. T. (2009). Corpora and Experimental Methods: A State-of-the-art Review. *Corpus Linguistics and Linguistic Theory*, 5-1, 1-26.
- Laufer, B., & Eliassen, S. (1993). What Causes Avoidance in L2 Learning: L1-L2 Difference, L1-L2 Similarity, or L2 Complexity. *Studies in Second Language Acquisition*, 15, 35-48.
- Liu, D. (2011). The Most Frequently Used English Phrasal Verbs in American and British English: a Multicorpus Examination. *TESOL Quarterly*, 45 (4), 661-688.
- Mönnink, I. D. (1997). Using Corpus and Experimental Data: A Multimethod Approach. In M. Liung (Ed.), *Corpus-based Studies in English* (pp. 227-244). Amsterdam; Rodopi.
- Nakamoto, A., & Yokozawa H. (2004). Levels of Processing and Task Variations in the Acquisition of English Phrasal Verbs by Japanese EFL Learners. Retrieved July 18, 2012, from http://www.lib.kobe-u.ac.jp/handle_kernel/00517987
- Quirk, R., & Svartvik, J. (1979). A Corpus of Modern English. In H. Bergenholtz & B. Schaefer (Eds.), *Empirisch Textwissenschaft Aufbau und Anwertung van Textcorpora*, (pp. 204-218). Koenigstein: Scriptor.
- Waibel, B. (2007). *Phrasal Verbs in Learner English: A Corpus-based Study of German and Italian Students*. Ph. D. dissertation, Albert Ludwigs University.
- Uchida, T. (2012). Use of Multiword Verbs by Non-advanced EFL Learners: Focusing on Common Verb + Particle Combinations. *Corpus-based Linguistics and Language Education Report*, 8, 303-323.

付表A BNCにおける高頻出100句動詞

| | | | | | | | | | |
|----|------------|----|------------|----|-------------|----|-------------|-----|--------------|
| 1 | go on | 2 | carry out | 3 | set up | 4 | pick up | 5 | go back |
| 6 | come back | 7 | go out | 8 | point out | 9 | find out | 10 | come up |
| 11 | make up | 12 | take over | 13 | come out | 14 | come on | 15 | come in |
| 16 | go down | 17 | work out | 18 | set out | 19 | take up | 20 | get back |
| 21 | set down | 22 | turn out | 23 | take on | 24 | give up | 25 | get up |
| 26 | look up | 27 | carry on | 28 | go up | 29 | get out | 30 | take out |
| 31 | come down | 32 | put down | 33 | put up | 34 | turn up | 35 | get on |
| 36 | bring up | 37 | bring in | 38 | look back | 39 | look down | 40 | bring back |
| 41 | break down | 42 | take off | 43 | go off | 44 | bring about | 45 | go in |
| 46 | set off | 47 | put out | 48 | look out | 49 | take back | 50 | hold up |
| 51 | get down | 52 | hold out | 53 | put on | 54 | bring out | 55 | move on |
| 56 | turn back | 57 | put back | 58 | go round | 59 | break up | 60 | come along |
| 61 | sit up | 62 | turn round | 63 | get in | 64 | come round | 65 | make out |
| 66 | get off | 67 | turn down | 68 | bring down | 69 | come over | 70 | break out |
| 71 | go over | 72 | turn over | 73 | go through | 74 | hold on | 75 | pick out |
| 76 | sit back | 77 | hold back | 78 | put in | 79 | move in | 80 | look around |
| 81 | take down | 82 | put off | 83 | come about | 84 | go along | 85 | look round |
| 86 | set about | 87 | turn off | 88 | give in | 89 | move out | 90 | come through |
| 91 | move back | 92 | break off | 93 | get through | 94 | give out | 95 | come off |
| 96 | take in | 97 | give back | 98 | set down | 99 | move up | 100 | turn around |

Gardner and Davies (2007)

付表B 日本人学習者コーパス間、母語話者の学習者コーパス (LOCNESS) との対数尤度比

| | PERC —JEFLL | JEFLL —NICE | PERC —NICE | LOCNESS —PERC | LOCNESS —JEFLL | LOCNESS —NICE |
|-------------|----------------|----------------|---------------|------------------|-------------------|------------------|
| carry out | 98.64 | 0.86 | 10.88 | 0.01 | 35.96 | 8.01 |
| perform | 462.41 | 2.86 | 96.72 | | | |
| carry | 27.11 | 4.33 | 17.97 | | | |
| bring about | 2.99 | 0.70 | 0.01 | 65.06 | 46.92 | 10.81 |
| cause | 251.75 | 62.26 | 0.08 | 15.98 | 181.44 | 3.61 |
| point out | 41.97 | 23.42 | 1.39 | 65.38 | 106.21 | 8.20 |
| go on | 16.33 | 5.57 | 22.91 | 240.92 | 72.80 | 10.18 |
| carry on | 1.13 | 0.61 | 0.27 | 52.26 | 18.61 | 8.01 |
| keep on | 5.62 | 0.00 | 1.00 | 1.36 | 3.84 | 2.37 |
| continue | 8.25 | 37.17 | 28.32 | 244.58 | 186.19 | 11.45 |

付表C ICNALE コーパスにおける母語話者 (NS) と非母語話者 (中国、香港、インド、日本、韓国、パキスタン、タイ、台湾) の句動詞の使用状況

| | NS | CHN | HKG | IDN | JPN | KOR | PAK | THA | TWN |
|-------------|----------------|-----------------|----------------|---------------|-----------------|----------------|---------------|----------------|-----------------|
| go on | 14/339 4.1% | 5/234 2.1% | 2/66 3.0% | 1/88 1.1% | 10/569 1.8% | 2/273 0.7% | 3/111 2.7% | 1/386 0.3% | 4/181 2.2% |
| carry out | 4/14 28.6% | 12/20 60% | 2/4 50% | 1/6 16.7% | 9/19 47.4% | 2/6 33.3% | 1/15 6.7% | 1/8 12.5% | 4/5 80% |
| point out | 6/53 11.3% | 9/134 6.7% | 4/39 10.3% | 1/12 8.3% | 2/126 1.6% | 4/48 8.3% | 2/24 8.3% | 2/23 8.7% | 3/30 10% |
| take away | 9/250 3.6% | 14/855 1.6% | 3/99 3.0% | 2/163 1.2% | 0/249 0% | 3/124 2.4% | 1/230 0.4% | 4/245 1.6% | 4/215 1.9% |
| bring up | 5/37 13.5% | 1/159 0.6% | 1/21 4.8% | 0/39 0% | 7/44 15.9% | 3/26 11.5% | 0/10 0% | 0/46 0% | 1/21 4.8% |
| take on | 20/250 8.0% | 5/855 0.6% | 0/99 0% | 3/163 1.8% | 0/249 0% | 1/124 0.8% | 5/230 2.2% | 5/245 2.0% | 0/215 0% |
| end up | 13/49 26.5% | 0/39 0% | 0/7 0% | 1/13 7.7% | 2/30 6.7% | 0/25 0% | 1/27 3.7% | 0/21 0% | 1/13 7.7% |
| grow up | 13/25 52% | 27/46 58.7% | 0/3 0% | 3/11 27.3% | 30/56 53.6% | 30/51 58.8% | 5/15 33.3% | 22/39 56.4% | 17/26 65.4% |
| give up | 6/158 3.8% | 58/254 22.8% | 13/67 19.4% | 4/227 1.8% | 47/327 14.4% | 20/231 8.7% | 5/167 3.0% | 8/282 2.8% | 27/111 24.3% |
| bring about | 2/37 5.4% | 9/159 5.7% | 1/21 4.8% | 1/39 2.6% | 1/44 2.3% | 2/26 7.7% | 0/10 0% | 2/46 4.3% | 0/21 0% |
| find out | 7/212 3.3% | 8/310 2.6% | 4/66 6.1% | 3/88 3.4% | 2/129 1.6% | 7/148 4.7% | 3/48 6.3% | 9/314 2.9% | 15/170 8.8% |
| make up | 5/372 1.3% | 10/844 1.2% | 0/84 0% | 2/494 0.4% | 4/904 0.4% | 3/521 0.6% | 3/212 1.4% | 2/1225 0.2% | 4/441 0.9% |
| set up | 3/28 10.7% | 20/91 22.0% | 9/18 50% | 3/19 15.8% | 13/39 33.3% | 2/7 28.6% | 1/7 14.3% | 6/34 17.6% | 8/53 15.1% |
| go back | 2/339 0.6% | 4/234 1.7% | 0/66 0% | 3/88 3.4% | 3/569 0.5% | 1/273 0.4% | 1/111 0.9% | 11/386 2.8% | 2/181 1.1% |
| break down | 0/9 0% | 2/6 33.3% | 0/2 0% | 0/6 0% | 1/4 25% | 0/11 0% | 0/3 0% | 0/6 0% | 0/1 0% |
| get away | 1/363 0.3% | 5/669 0.7% | 3/149 2.0% | 0/498 0% | 0/923 0% | 0/529 0% | 1/319 0.3% | 0/679 0% | 0/369 0% |
| cut off | 0/11 0% | 0/2 0% | 0/0 0% | 0/2 0% | 0/3 0% | 0/4 0% | 0/1 0% | 1/1 100% | 1/4 25% |

各項目の上段左が使用された句動詞の実数、上段右が動詞の実数、下段が使用された動詞句の中の句動詞の割合を表す。

付表D ICNALE コーパスにおける母語話者 (NS) と非母語話者 (中国、香港、インド、日本、韓国、パキスタン、タイ、台湾) の動詞の使用数と後続の語句の種類

| | NS | CHN | HKG | IDN | JPN | KOR | PAK | THA | TWN |
|---------------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|------|-----|
| go の使用数 (A) | 339 | 234 | 66 | 88 | 569 | 273 | 111 | 386 | 181 |
| goの後続種類 (B) | 63 | 54 | 17 | 28 | 60 | 48 | 31 | 61 | 36 |
| B ÷ A | 19% | 23% | 26% | 32% | 11% | 18% | 28% | 16% | 20% |
| takeの使用数 (A) | 250 | 855 | 99 | 163 | 249 | 124 | 230 | 245 | 215 |
| takeの後続種類 (B) | 73 | 92 | 33 | 41 | 81 | 51 | 86 | 71 | 70 |
| B ÷ A | 29% | 11% | 33% | 25% | 33% | 41% | 37% | 29% | 33% |
| getの使用数 | 363 | 669 | 149 | 498 | 923 | 529 | 319 | 679 | 369 |
| comeの使用数 | 148 | 144 | 22 | 73 | 229 | 101 | 134 | 202 | 44 |
| giveの使用数 | 158 | 254 | 67 | 227 | 327 | 231 | 167 | 282 | 111 |
| bringの使用数 | 37 | 159 | 21 | 39 | 44 | 26 | 10 | 46 | 21 |
| makeの使用数 | 372 | 844 | 84 | 494 | 904 | 521 | 212 | 1225 | 441 |
| sayの使用数 | 149 | 263 | 33 | 93 | 460 | 143 | 90 | 87 | 78 |
| showの使用数 | 58 | 107 | 26 | 22 | 49 | 45 | 30 | 51 | 32 |

A Corpus-based Study of Japanese EFL Learners' Use of English Phrasal Verbs

Yutaka IIO

This paper mainly deals with how English phrasal verbs are used by both English natives and non-natives like Japanese EFL learners, using some corpora. It will also discuss not only the differences of the phrasal verb usage between them but also the tendency of the Japanese EFL learners to learn the phrasal verbs. As a result, it is revealed that Japanese EFL learners as well as other non-native EFL learners generally underuse phrasal verbs except for some phrases and that there are easier ones among them to learn and use. This study shows a certain number of objective data of the high-frequency phrasal verbs so that we can make use of them in order to learn phrasal verbs effectively. In conclusion, we propose that much repetition or deep processing of learning should be needed to promote the acquisition of phrasal verbs.